

ハスカップとは

和名：クロミノウグイスカグラ（黒実鶯神楽）

学名：*Lonicera caerulea* var. *emphylocalyx*

- ・ スイカズラ科スイカズラ属の落葉低木です（若枝に毛が多いものはケヨノミ）
- ・ ハスカップはアイヌ語の「ハシカッ（枝の上にたくさんなるもの）」が転訛
- ・ 5月には黄色い花を咲かせ、6月から7月にかけて碧黒色の果実が成熟
- ・ 苫小牧市では、低湿地帯である勇払原野に多く自生
- ・ 実には塩漬けやジャム、製菓に加工され、昔から苫小牧市民に利用され、広く普及
- ・ 苫小牧市の「市の木の花」はハスカップ



ハスカップの花



ハスカップの実

ハスカップバンクの取り組み

苫小牧市民に馴染みのあるハスカップも、今では北海道を代表する小果樹のひとつとして、道内さまざまな地域で栽培されています。しかし、天然のハスカップを目にすることは非常に難しくなっており、ハスカップの自生地を有するここ苫小牧市でも、造成、開発、地形の変化等によって生育できる場所が減少し、自生のハスカップを見つけることがなかなかできなくなってきました。

2019年、このままでは苫小牧市内に自生するハスカップがどんどん減少してしまい、いつか天然のハスカップが見られなくなってしまうのではと懸念した有志が集まりました（ハスカップバンクの結成）。

栽培用・生産用に選抜されたハスカップではなく、もともと苫小牧市に自生していたハスカップに由来するものに絞り、ハスカップを苫小牧市の郷土木（きょうどぼく）として、市民が自ら増殖し、市内の多くの場所でハスカップが見られるようにしたいという思いから、ハスカップの増殖活動を開始しました。

当初、ハスカップの増殖は、それぞれ各々で個別に行っていました。そのため安定した結果は得られず、うまくいったりうまくいかなかったり、その結果、増殖できた苗木の数は少なく、その後の生育も悪いという共通の問題が浮かび上がりました。

また、苫小牧市は北海道の中でも寒冷で積雪が少ない傾向にあります。そのため、一般に広く用いられている増殖方法をそのまま行っただけでは、必ずしもうまくいかない場合も多々ありました。

そこで、これらの問題を解決するため、北海道立総合研究機構 林業試験場に技術提供を依頼することにしました。

林業試験場のアドバイスにより、苫小牧市の寒冷で積雪の少ない気候に合った増殖方法を確立することができました（とまこまいスタイルの増殖方法）。さらに、大きく育ったハスカップ苗の移植方法、剪定（せんてい）などのその後の維持管理方法などについても、とまこまいスタイルを確立すべく努力しております。

苫小牧の自生地由来のハスカップを所有する方の情報収集を行った結果、これらのハスカップはほぼ同時期（40年～50年前）に移植されており、株は大きくなり過ぎ、傷みがある状態のものが多く見られました。そこでハスカップバンクでは、これらの株の更新を図るとともに、まず、挿し木増殖を行うこととしました。



ハスカップの自生地

【ハスカップバンクの構成メンバー】

苫小牧市
苫小牧造園協同組合
苫小牧市シルバー人材センター
出光興産株式会社 北海道製油所
株式会社地域環境計画
苫小牧植物資源協議会
北海道立総合研究機構 林業試験場

普及活動

ハスカップバンクでは、技術者を増やすこと、とまこまいスタイルの増殖方法、維持管理方法を確立することをファーストミッションとしました。現在、フィールドを広げ、生物多様性の面から、自生株からの挿し木増殖、種からの増殖を行っています。今後は、苗の生産、関係苗畑の保存やその活用を行っていきたいと思っています。また、ハスカップの新たな価値を見つけるため、枝を使ったクラフトの提案も行っています。



ハスカップの枝で作った
つま楊枝（ようじ）



勉強会の様子



市民向け講座



苫小牧駅前に植栽された増殖したハスカップ

挿し木

挿し木とは、増やしたい木の枝を切り取って、そこから発根させて増やす、無性繁殖法（むせいはんしょくほう）のひとつです。挿し木による増殖法が成功すれば、種から育てるよりも早く成長します。また、挿し穂を取った親木と同じ性質を持った木を増やすことができます。

一般的に樹木の挿し木には、「春挿し」と「夏挿し」の2種類の方法があります。休眠期（2月～3月）に挿し穂を採取し、雪下などで貯蔵して春先に挿すという「春挿し」に関しては、苫小牧市では雪が少なく、雪下で挿し穂を貯蔵、越冬させることが困難でした。そのため、今年伸びた枝を夏（7月～8月半ば）に採取し、速やかに挿し付ける「夏挿し（緑枝挿し）」という方法で挿し木を行うことにしました。



今年伸びた元気な枝を使い、節を3つ程含む長さに切り、一番下の葉が付いていた部分のすぐ下を斜めにカットし、鹿沼土に切り口を傷めないように差し込みます



11月頃の根の様子



冬期は鹿沼土に横にして寝かせ、春先にポットに移します

種まき

果実は、6月から7月頃、碧黒色に完全に熟してから収穫します。その時、落下している果実は、虫が入っていたり雑菌が入っていたりして発芽しにくいいため、必ず樹上に熟しているものから収穫します。

一般に、果皮や果肉には種の発芽を抑制する物質が含まれているため、果皮や果肉が残らないようにしっかりと取り除きます。また、浮いた種はほとんど発芽しないため取り除きます。そのまま、種まきしても良いですが、乾燥しないようにポリ袋などに密閉して冷蔵庫で保存し、秋に種まきしても構いません。

種をまく時には、砂など細かい土と混ぜて栄養分を含む用土にまきます。種まき後は、直射日光を避けて管理します。夏場であれば、乾燥しないように水やりを行い、秋にまく場合は、水やりは春先の乾燥が続くようになった頃から行います。



きれいに種を取り出す



翌年の春に発芽



発芽して1年後

移 植

苫小牧市民の方から、ハスカップの大苗をもらい受けることができました。そこで、苗の移植を春と秋に行いました。

春移植は、芽吹き前に行いました。これから生育期に入るため、根鉢を大きく取り、古い枝を整理して移植を行いました。

秋移植は、これから冬に向かい休眠期に入るため、上部の枝を大きく切り下げ、根鉢は小さく割り、運搬しました。また、株分けも行いました。



春移植のようす



その年の芽吹き



春移植では、少量ですがその年から果実を収穫することができます。

秋移植では、果実がなるまで2, 3年かかりますが、株を一気に更新することができます。



秋移植のようす



翌春の芽吹き

剪定

ハスカップは、5年生以上の枝にはほとんど果実が付かないため、古くなった枝は剪定を行います。落葉期に、古くなった枝のみをできるだけ株元から近いところで切り取る剪定方法と、古い枝のみならず全ての枝を一気に切り戻して更新を計る剪定方法があります。その際、枝を20 cmくらいの高さまですべて切り落とします。



剪定前の様子



古枝のみを根元から剪定



どちらの剪定方法でも、翌春には新しい枝が出てきますが、毎年、果実を収穫したいのであれば、毎年少しずつ、古くなった枝のみを剪定する方が望ましいと思います。



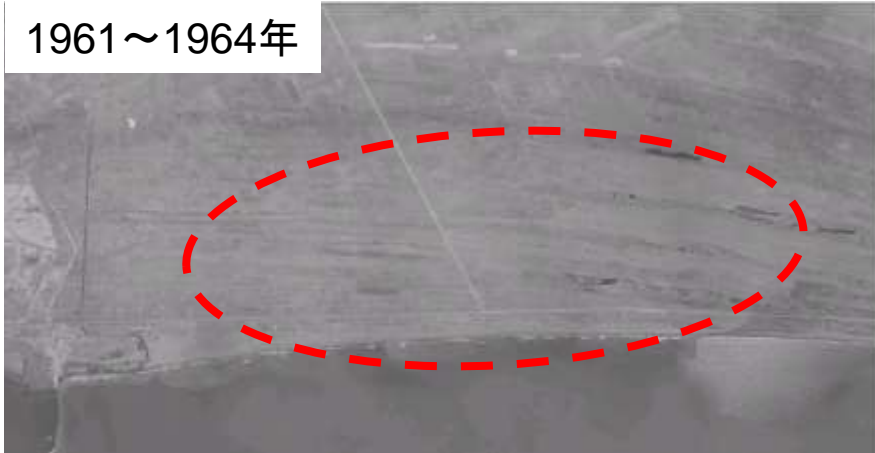
一気に切り戻して更新剪定



剪定後の春先の様子

出光ハスカップ園 <成り立ち～現在>

1961～1964年

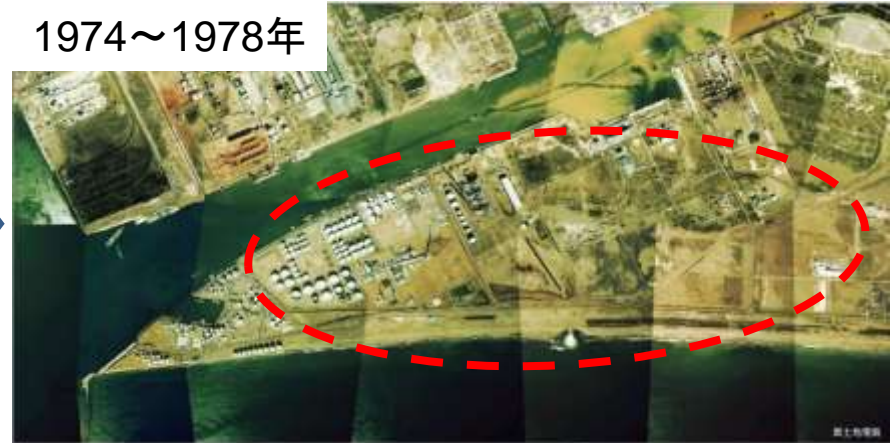


出光興産株式会社 北海道製油所のある場所は1960年代には原野や砂丘が広がっていました。

1990年代後半に、製油所の施設の東側に総合運動公園が誕生しました。その際、残された原野に自生していたハスカップを集めて出光ハスカップ園がつけられたのです。

また、周辺の開発時から残存していたハスカップ自生株が保全のため、出光ハスカップ園に移植されました。

1974～1978年



1970年代に勇払の港湾が掘りこみ、埋立てられて、製油所設備等が建設されました。

2020年



出光ハスカップ園

出光ハスカップ園 <保全・試験の場として>

出光ハスカップ園に生育するハスカップは、栽培された園芸種ではなく、勇払原野に自生していたハスカップ(クロミノウグイスカグラ,ケヨノミ)です。そのため、実の大きさや味(酸っぱさ・甘さ・渋さ)も個性豊かです。

出光興産北海道製油所では、貴重な苫小牧の自生ハスカップ資源を保存・育成するため、出光ハスカップ園を「ハスカップバンク」の様々な取り組みの場として提供、協働しています。



出光ハスカップ園

